

大学生の向社会的行動および 共感性と親子関係との関連

辻道英里奈*・植田 瑞穂**・桂田恵美子***

抄録：本研究は、大学生の親子関係（両親の養育態度）と向社会的行動および共感性との関連を検討することを目的とし、263名の対象者の質問紙回答を分析した。その結果、男性において両親の受容性が高い群で共感性が高かったが、向社会的行動とは関連しなかった。また、男性において共感性と向社会的行動に相関は見られなかった。このことから、親の受容的な態度は男性の共感性にポジティブな影響を与えるが、男性における共感性は向社会的行動の規定因にはならないため、向社会的行動には影響を与えないことが示唆された。一方、女性においては母親の受容性が高い群で共感性と向社会的行動が高かったことから、母親の受容的な態度がポジティブな影響を与えることが示唆された。しかし、父親の受容性は共感性とは関連しないことから、モデリングを通じて直接向社会的行動に影響を与えることが考えられた。さらに、父親の統制性が高い群で共感性が低かったことから、父親の統制的な態度が女性の自発的な共感反応の生起を阻害する可能性があることが示唆された。

キーワード：親子関係、向社会的行動、共感性、大学生

問題と目的

我々の行動傾向やパーソナリティは人によって実に様々である。このような特性の個人差はどのように形作られるのだろうか。秋山（2012）によると、人間の発達には、親子関係や文化などの環境規定因、遺伝子や進化などの生物学的規定因、自己概念や自尊感情などの自己規定因が影響を及ぼしている。その中でも、環境規定因の一つである親子関係は、人の行動傾向やパーソナリティとの関連について数多くの研究が行われている概念である。

親子関係のうち、親から子どもへの影響過程についての代表的な研究は、子どもに対する親の態度や行動に関するものである（小高，2014）。そのうち、辻岡（1976）は親子関係診断尺度（EICA）を作成し、情緒的支持、同一化、統制、自律性の4つの下位因子によって親子関係が構成されることを示している。情緒的支持とは、親が自分を支持していると子どもが認知する傾向であり、親の情緒的な支持・平等・知的向上の促進・独立心の奨励・社交性の育成など、親が子どもを承認し受容する傾向を示す。同一化とは、親子の結合の強度であり、親が自分と一体感を持ち、意識の底で同一化し、自分の延長または分身として子どもを認知している傾向を示す。統

制とは、しつけや勉強への厳しさなど、親からの超自我の圧力を子どもが認知する傾向である。自律性は、人格を認め、子どものことは子ども自身に任せようという親の態度のことであり、しつけが甘く、命令的でないという傾向を示す。

辻岡（1976）によると、これら4つの下位因子のうち、情緒的支持と同一化を総合したものを「受容性-拒否性」、統制と自律性の否定を総合したものを「統制性-自律性」として、親子関係を2つの軸に集約することができる。受容性の高さは親の子どもに対する承認、受容、愛情を示すものであり、統制性の高さは親の子どもへの統制の強さを示すものである。

そのような親子関係や養育態度は、向社会的行動（prosocial behavior）をはじめとした子どもの社会的な行動に影響を与えているとされている。菊池（1984）によると向社会的行動とは、何らかのコスト（損失）を伴うもので、外的な報酬を得ることを目的としない、自発的な援助行動のことである。向社会的行動をとる傾向は、その子どもがどのような家庭で育てられ、そこでどのようなしつけを受けたかということなどによって左右されると述べられている（菊池，1984）。とりわけ、子どもが生まれて初めて接する人間関係である親子関係は、向社会的行動に大きな影響を与えていると考えられ

*関西学院大学文学部

**関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程

***関西学院大学文学部教授

ることから、向社会的行動に関する研究には親子関係の影響を問題としたものがよく見られる。例えば、森下・庵田（2005）は、幼稚園児を対象に親子関係が与える向社会的行動への影響を研究した。幼稚園児の向社会的行動の特徴を両親および担任教師に評定させ、さらに両親には自身の向社会的行動および養育態度の特徴を評定させた。その結果、男児・女児ともに父親の受容性が高い群の方が低い群よりも子どもの向社会的性得点が高いことが示され、これは母親の受容性についても同様だった。このことから、受容的な親子関係が子どもの向社会的行動を促進させることが示唆された。この研究では、さらに各群における両親の向社会的性と子どもの向社会的性の相関から、向社会的行動のモデリング（modeling）について検討し、父親が受容的な場合に女兒は父親の高い向社会的性をモデルにして自身も高い向社会的性を形成することや、男女ともに受容性が低い母子関係ではモデリングの結果低い向社会的性が形成されることが示されている。このことから、向社会的行動の生起メカニズムとして、両親からの行動のモデリングが生じていることが部分的に示唆されていると言える。

ところで、向社会的行動はいわゆる「思いやり」の行動的側面であるが、それに関連した内的な特性として共感性（empathy）が挙げられる。心理学の領域において、共感性とは「相手の感情を理解すること」とする認知面を重視した定義と「相手の感情を自分も同じように感じる」とする感情面を重視した定義というように、2つの側面にスポットを当てた定義がある（澤田，1995）。鈴木・木野（2008）は、この認知と感情といった2つの側面において、他者指向性および自己指向性といった特徴に焦点を当て、下位概念を整理している。それによると共感性は、自発的に他者の心理的視点を取ろうとする「視点取得」、架空の人物に自身を投影して想像する「想像性」、他者に対する同情や配慮である「共感的配慮」、苦しむ他者に対する不安や不快である「個人的苦痛」、他者の心理状態に対する影響の受けやすさである「被影響性」といった、5つの下位概念から構成される。鈴木（1992）の研究では、女子大学生への質問紙調査の結果、共感性は向社会的行動に対して有意な正の効果を及ぼしていることが分かっている。このことから、共感性が高い人は向社会的行動をとりやすい傾向にあり、共感性は向社会的行動の規定因であるということが言える。

親子関係と向社会的行動が関連するメカニズムとしては、前述の行動のモデリングが挙げられているが（森下・庵田，2005）、共感性も一緒に考慮することで、内的な特性を含めたメカニズムについて示唆することができると考えられる。これまでの研究では、親子関係と共感性の関連についてはすでに示されている。八越・新井（2007）は、小学5、6年生を対象に、母親の養育態度が

共感性に及ぼす影響について研究した。親子関係診断尺度と児童用共感性測定尺度などで構成された質問紙調査を行った結果、母親の情緒的支持から共感性に正のパスが示され、親の情緒的支持は子どもの共感性を高めることが確認された。このことから、情緒的に支持されていると子どもが感じているというような良好な親子関係は、子どもの共感性の発達にポジティブな影響を与えることが示唆されたと言える。

森下・庵田（2005）や八越・新井（2007）の研究から、親子関係は子どもの向社会的行動や共感性とそれぞれ関連があることが示されたが、どちらも幼児や児童を対象としている。親子関係が子どもに与える影響についての研究は数多くあり、これらの研究のように幼児や児童を対象としたものは多く見られるが、大学生などの青年を対象とした研究はあまり多くはない。けれども大学内、サークル活動、アルバイトなど多くの場で様々な人間関係を築き、卒業後には就職をしてより多くの人と関わる必要のある大学生にとって向社会的行動や共感性は非常に重要ではないかと考えられる。さらに、一人暮らしを始めることなども多く、親から自立し始める大学生を対象として親子関係と向社会的行動および共感性の関連を検討することは、生涯発達の観点から見て重要であると考えられる。

そこで、本研究では大学生を対象として質問紙調査を行い、親子関係と向社会的行動および共感性との関連を検討することとする。なお、向社会的行動や共感性は、多くの場合男性より女性の方が高い傾向が見られる（村上・西村・櫻井，2016；登張，2003）ため、本研究でも性別により結果が異なると予測し、分析は性別ごとに行った。森下・庵田（2005）や八越・新井（2007）の研究から、本研究では親が受容的であれば対象者の向社会的行動が多く見られ、共感性も高くなるという仮説を立てた。

方 法

1. 調査期間、場所および状況

2016年7月11日～2016年10月27日の期間に大学の講義内および部室内で質問紙を配布・回収した。回答時間はおよそ15分であった。

2. 対象者

関西学院大学の学生（1～4年生）303名を対象に調査を行った。なお、データ分析は回答漏れなどの欠損値がある対象者、父親および母親どちらかの親子関係に対してしか回答していない7名の対象者を除いた263名を対象として行った。つまり本研究では両親がいると思われる人のみを対象に分析を行った。男性59名、女性204名で平均年齢は20.24歳（19歳～25歳）であった。

3. 質問紙

本研究で用いた質問紙は調査の教示、学生番号、年齢および性別を尋ねるフェイスシートと以下の3尺度で構成されていた。親子関係を測定する尺度は父親、母親共に同じものであり、全て対象者に回答させた。

1) 親子関係診断尺度 EICA (以下 EICA とする; 辻岡, 1976)

子ども側から見た親子関係を測定するものである。「私が困っているときには元気づけてくれる」などの情緒的支持 (ES), 「ほかのだれよりも私といっしょにいたがる」などの同一化 (ID), 「私が何をすべきかいつも私に注意したがる」などの統制 (CO), 「なんでも私がしたいようにさせてくれる」などの自立性 (AU) の4因子から構成されている。各因子10項目ずつの合計40項目から成る。さらに、二次因子としてESとIDを総合したものを受容性-拒否性 (以下受容性とする) とし、AUの否定とCOを総合したものを統制性-自律性 (以下統制性とする) としている。なお、EICAは主に中学生、高校生を対象に作成されたため、「私のやりたいときに宿題をやらせてくれる」を「私のやりたいときにやるべきことをさせてくれる」に、「私といっしょに仕事をするときは、私の意見を聞いてくれる」を「私といっしょに何かするときは、私の意見を聞いてくれる」に変更した。

「はい」「?」「いいえ」の3件法で回答させ、ES, ID, COの項目については「はい」を2点、「?」を1点、「いいえ」を0点として、AUの項目については「いいえ」を2点、「?」を1点、「はい」を0点として得点を算出し、ESとIDの合計値を受容性得点、AUとCOの合計値を統制性得点とした。度数分布を確認したところ、大きな偏りは見られなかったため、本研究における親子関係はこれらの二次因子を使用して表すこととした。尺度の信頼性を示すCronbachの α 係数を算出したところ、父親の受容性は $\alpha = .90$ 、母親の受容性は $\alpha = .88$ 、父親の統制性は $\alpha = .82$ 、母親の統制性は $\alpha = .84$ であった。

2) 向社会的行動尺度 (大学生版) (菊池, 1988)

既存の尺度である愛他的行動尺度を参考にして菊池が独自に作成したもので、援助行動や親切行動などの向社会的行動をどの程度行っているかを自己報告によって測定する尺度である。「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる。」「お店で、渡されたおつりが多かったとき、注意してあげる。」などの合計20項目で構成されている。「したことがない (1点)」~「いつもした (5点)」までの5件法で回答させ、単純加算した合計得点が高い方が向社会的行動は多く見られることを示す。尺度の信頼性を示すCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .83$ であった。

3) 多次元共感性尺度 (MES) (鈴木・木野, 2008)

他者の心理状態に対する認知・情動の反応傾向を測定する尺度であり、共感性の下位概念に対応した5つの下位尺度から構成されている。なお、この尺度は、他者の苦痛だけではなく快感情への反応傾向を含めて測定するため、「共感的苦痛」は「他者指向的反応」、「個人的苦痛」は「自己指向的反応」として表されている。

具体的には、認知的側面として「自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。」などの視点取得 (5項目)、「面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がかもしも自分に起きたらと想像する。」などの想像性 (5項目)、情動的側面として「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。」などの他者指向的反応 (5項目)、「他人の失敗する姿をみると、自分はそうなりたくないと思う。」などの自己指向的反応 (4項目)、「まわりの人がそうだといえば、自分もそうだと思ってくる。」などの被影響性 (5項目)の合計24項目から構成されている。各項目について、「全く当てはまらない (1点)」~「とてもよく当てはまる (5点)」までの5件法で回答させた。逆転項目を処理した後、規定に従い各下位尺度ごとに得点を合計し、項目数で除算して下位尺度得点を算出した。

本研究では、全体的な共感性の傾向を扱うことを目的とし、各下位尺度得点を合計した得点を用いて親子関係との関連を検討した。共感性尺度全体について、尺度の信頼性を示すCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .80$ であった。

結 果

1. 各得点の記述統計量および性差

各得点について、全体および男女別の平均値と標準偏差をTable 1に示した。表から明らかなおとおり、いずれについても男性よりも女性の得点の方が高かった。得点の性差について対応のないt検定で検討したところ、父親の受容性 ($t = -2.05, df = 261, p < .05$)、母親の受容性 ($t = -3.31, df = 261, p < .01$)、母親の統制性 ($t = -2.35, df = 261, p < .05$)、向社会的行動 ($t = -2.20, df = 261, p < .05$)、共感性 ($t = -4.36, df = 261, p < .01$)に

Table 1 各得点の全体および男女別の平均値と標準偏差

得点名	全体		男性		女性	
	M	SD	M	SD	M	SD
父親の受容性	20.18	(9.57)	17.95	(9.51)	20.83	(9.52)
母親の受容性	25.18	(8.87)	21.88	(9.74)	26.14	(8.39)
父親の統制性	10.36	(7.37)	9.53	(7.59)	10.60	(7.31)
母親の統制性	12.07	(8.26)	9.86	(7.00)	12.71	(8.49)
向社会的行動	56.26	(12.79)	53.05	(12.95)	57.18	(12.63)
共感性	17.89	(2.30)	16.78	(2.09)	18.22	(2.27)

ついて性別間で有意な差が見られた。父親の統制性 ($t = -0.99, df = 261, ns$) についてのみ有意な差が見られなかった。このことから、女性は両親の受容性や母親の統制性を男性よりも高く評定していることや、向社会的行動や共感性の傾向も女性の方が高いことが示された。

2. 向社会的行動と共感性の関連

対象者の向社会的行動と共感性にどの程度関連があるかを検討するために、性別ごとに相関分析を行った。その結果、男性では有意な相関は見られなかった ($r = -0.07, ns$)。一方、女性では弱い正の相関が見られた ($r = .33, p < .01$)。つまり、向社会的行動が多く見られる女性は、共感性も高い傾向があることが示された。

3. 親子関係と向社会的行動との関連

親子関係の受容性得点および統制性得点について、平均値を基準として高群と低群に分け、分析を行った。Table 1の全体の平均値より、父親の受容性得点については0点~20点までを低群(男性: $n = 35$, 女性: $n = 99$), 21点~40点を高群(男性: $n = 24$, 女性: $n = 105$)とし、統制性得点は0点~10点までを低群(男性: $n = 38$, 女性: $n = 108$), 11点~33点を高群(男性: $n = 21$, 女性: $n = 96$)とした。母親については、受容性得点は0点~25点までを低群(男性: $n = 34$, 女性: $n = 92$), 26点~40点を高群(男性: $n = 25$, 女性: $n = 112$)とし、統制性得点は0点~12点までを低群(男性: $n = 41$, 女性: $n = 115$), 13点~40点を高群(男性: $n = 18$, 女性: $n = 89$)とした。

Table 2に各親子関係の群における向社会的行動得点の平均値と標準偏差値を男女別に示した。親子関係の違いで子どもの向社会的行動の出現頻度に差があるかどうかを検討するため、向社会的行動得点について、各親子関係の高低二群間の差を対応のない t 検定で比較した。なお、上記の分析で向社会的行動、父親・母親の受容性得点および母親の統制性得点に性差が見られたため、男女別に分析を行った。分析の結果、男性の向社会的行動

得点については、父親の受容性 ($t = -0.24, df = 57, ns$), 母親の受容性 ($t = -1.05, df = 57, ns$), 父親の統制性 ($t = -1.37, df = 57, ns$), 母親の統制性 ($t = -0.13, df = 57, ns$) いずれの高低二群間においても有意な差は見られなかった。このことから、男性の向社会的行動には親子関係は関連していないことが示された。女性の向社会的行動については、父親の受容性の高低二群間で有意な傾向の差が見られ ($t = -1.74, df = 202, p < .10$), 母親の受容性の高低二群間で有意な差が見られた ($t = -2.24, df = 202, p < .05$)。父親の統制性 ($t = -0.22, df = 202, ns$), 母親の統制性 ($t = -1.47, df = 202, ns$) には有意な差は見られなかった。このことから、両親の受容性が高ければ、女性の向社会的行動が多く見られることが示された。

4. 親子関係と共感性との関連

Table 3に各親子関係の群における共感性得点の平均値と標準偏差値を男女別に示した。親子関係の違いで子どもの共感性の高さに差があるかどうかを検討するため、共感性得点について各親子関係の高低二群間の差を対応のない t 検定で比較した。なお、共感性、父親・母親の受容性得点および母親の統制性得点に性差が見られたため、男女別に分析を行った。分析の結果、男性の共感性得点について、父親の受容性 ($t = -2.36, df = 57, p < .05$) および母親の受容性 ($t = -3.26, df = 57, p < .05$) の高低二群間でそれぞれ有意な差が見られ、父親の統制性 ($t = 1.51, df = 57, ns$), 母親の統制性 ($t = 1.56, df = 57, ns$) には有意な差は見られなかった。このことから、両親の受容性が高ければ、男性の共感性が高くなることが示された。女性の共感性得点については、父親の統制性の高低二群間で有意な差が見られ ($t = 2.80, df = 202, p < .05$), 母親の受容性の高低二群間では有意な傾向の差が見られた ($t = -1.84, df = 202, p < .10$)。父親の受容性 ($t = -.41, df = 202, ns$) および母親の統制性 ($t = 1.05, df = 202, ns$) については有意な差は見られなかった。このことから、母親の受容性が高く、父親の統制

Table 2 親子関係と向社会的行動得点の男女別の平均と標準偏差

親子関係の群	男性		女性	
	M	SD	M	SD
受容性	父親	高群	53.54 (13.93)	58.67 (12.63)
		低群	52.71 (12.43)	55.61 (12.50)
	母親	高群	55.12 (13.91)	58.96 (11.90)
		低群	51.53 (12.18)	55.02 (13.21)
統制性	父親	高群	56.14 (12.76)	56.98 (13.28)
		低群	51.34 (12.90)	57.36 (12.08)
	母親	高群	53.39 (16.09)	58.65 (13.85)
		低群	52.90 (11.53)	56.04 (11.54)

Table 3 親子関係と共感性得点の男女別の平均と標準偏差

親子関係の群	男性		女性	
	M	SD	M	SD
受容性	父親	高群	17.53 (2.09)	18.28 (2.20)
		低群	16.27 (1.96)	18.15 (2.34)
	母親	高群	17.74 (2.13)	18.48 (2.22)
		低群	16.08 (1.78)	17.90 (2.29)
統制性	父親	高群	16.23 (2.20)	17.75 (1.98)
		低群	17.08 (1.99)	18.63 (2.43)
	母親	高群	16.15 (1.96)	18.03 (1.84)
		低群	17.06 (2.11)	18.36 (2.55)

性が低ければ、女性の共感性が高くなることが示された。

考 察

本研究は大学生を対象とし、親子関係と対象者の向社会的行動および共感性との関連を検討することを目的とした。

本研究の目的を検討するため、質問紙調査を行い、親子関係の二次因子（受容性および統制性）と向社会的行動および共感性の関連を男女別に検討した。その結果、女性においては母親の受容性が低い群より高い群の向社会的行動が多く見られることが示されたほか、父親の受容性が高い群の向社会的行動も多く見られる傾向にあった。このことから、両親の受容性が高ければ、女性の向社会的行動は多く見られることが示された。これは、受容的な親子関係が幼稚園児の向社会的行動と関連するという森下・庵田（2005）の研究と同様の結果となった。森下・庵田（2005）は幼児を対象に研究を行ったが、本研究では大学生も同様の結果になることが示され、親から自立し始める大学生においても、向社会的行動は親子関係の影響を受けることが示唆された。反対に、男性の向社会的行動には、親子関係との関連は見られなかった。島田・桂田（2015）の幼稚園児の向社会的行動についての研究において、女子の向社会的行動は母親の受容的養育態度と関連が見られたが、男子においてはその関連は見られず、母親自身の向社会的行動との関連が見られ、女子と男子の向社会的行動の発達のメカニズムが異なることが示唆された。本研究では、親自身の向社会的行動は測定されていないが、大学生においても男女で異なる向社会的行動の形成メカニズムが示唆された。

一方、共感性については、男性において父親および母親の受容性が低い群より高い群の共感性得点が高いことが示されたことから、両親の受容性が高い方が男性の共感性は高くなることが示された。向社会的行動とは異なる結果が得られた理由として、男性における共感性と向社会的行動の関連の低さが挙げられる。鈴木（1992）は、共感性が向社会的行動の規定因であるとしているが、これは女子大学生を対象に行った研究であり、本研究では共感性と向社会的行動の相関は女性にしか示されなかった。このことから、男性の共感性は向社会的行動を規定しないことが考えられる。鈴木（2008）は、女性は映画によって引き起こされた自分の感情をそのまま表現するのに対して、男性は映画そのものに対して分析して評価を述べるとしている。つまり、男性は女性のように感情をそのまま表出しないと考えられるため、共感性についても特に情動的側面を向社会的行動に反映させない可能性がある。本研究においては、男性において両親の受容性は仮説通りに共感性に影響を及ぼすが、共感性

が向社会的行動を規定しないため、向社会的行動には影響を及ぼさないことが示唆された。

また、女性においては、母親の受容性が高い群の共感性が高くなる傾向にあったほか、父親の統制性が高い群より低い群の共感性が高いことが示された。このことから、母親の受容性が高く、父親の統制性が低いほうが女性の共感性は高くなることが示された。森下・庵田（2005）の研究では、父親や母親の統制性についても検討されており、親の統制性と子どもの向社会的行動の関連は認められなかったものの、父親の統制性が高い群で男児および女児の攻撃性が高く、母親の統制性が高い群で女児の攻撃性が高いことが示された。このことから、統制性は場合によって、子どもの行動に対してネガティブな影響を与える可能性があると言え、本研究において父親の統制性の高さや女性の共感性の低さの関連が見られたのはこのためであると考えられる。

父親と女性の親子関係について、向社会的行動との関連と合わせて考えると、父親の受容性は向社会的行動という外的な行動の側面にポジティブに影響し、父親の統制性は共感性という内的な側面にネガティブに影響するということになる。EICAの低位因子の概念や項目例から明らかなどおり、統制性の高い親は「子どもが何をすべきか注意する」「子どもがしたいようにさせない」など、子どもの自律性を妨げる傾向が強い。このことから、統制的な親の元で育った子どもは、共感場面における自発的な認知的判断や感情的反応が阻害されている可能性がある。

一方、向社会的行動についても、共感性と同様に自律性が必要であると考えられるが、共感性と異なり父親の受容性のみとの関連が示されたことから、別のメカニズムがあると考えられる。先に述べた通り、森下・庵田（2005）では、父親が受容的な場合に、女児は父親の高い向社会的性をモデルとして自身も高い向社会的性を形成することが示されている。このことから、本研究の対象者においても、受容性得点の高い父親は日常的に向社会的行動を多く取っている可能性があり、その結果として向社会的行動のモデリングが生じ、親子関係が共感性を介さずに行動的側面に関連するということが示されたことが考えられる。

以上のことから、親が受容的であれば対象者の向社会的行動が多く見られ、共感性も高くなるという仮説は部分的に支持されたと言えるが、結果は一様ではないことが示された。具体的には、男性において両親の受容的態度は共感性にポジティブな影響を与えるが、共感性と向社会的行動の関連の低さから、向社会的行動には影響を与えないことが示唆された。一方、女性においては母親の受容性が共感性と向社会的行動にポジティブな影響を与えるが、父親の受容性は共感性には影響せず、モデリ

ングを通じて直接向社会的行動に影響を与えることや、父親の統制性が自発的な共感能力の生起を阻害する可能性があることが示唆された。

本研究では、両親の向社会的行動は測定しておらず、モデリングなどの向社会的行動の生起メカニズムはあくまでも推測の域を出ないため、今後の課題としては、これを含めて測定することで、行動のモデリングと共感性という両側面から、向社会的行動の形成プロセスを明らかにすることが重要である。また、菊池（1984）は、どのような家庭で育てられたかという家庭環境が、向社会的行動が見られるかどうかを左右するとしているため、ひとり親や虐待の有無などを質問紙で問い、家庭環境別に分析することでより興味深い研究になると考えられる。さらに、本研究における男性の人数が少ないため、結果を一般化するのは難しい。今後はより多くの男性のデータを分析する必要がある。

引用文献

- 秋山弘子（2012）. 発達の規定因 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子（編）発達科学入門Ⅰ 理論と方法（pp.21-44）東京大学出版会
- 菊池章夫（1984）. 向社会的行動の発達 教育心理学年報, 23, 118-127.
- 菊池章夫（1988）. 向社会的行動尺度（大学生版）堀洋道（監修）・吉田富二雄（編）心理測定尺度集Ⅱ - 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉（pp.178-181）サイエンス社出版
- 小高恵（2014）. 大学生の母 - 青年関係の相関分析 - 太成学院大学紀要論文, 16, 37-48.
- 森下正康・庵田奈甫（2005）. 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 15, 47-56.
- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男（2016）. 家族、友だち、見知らぬ人に対する向社会的行動 - 対象別向社旗的行動尺度の作成 - 教育心理学研究, 64, 156-169.
- 澤田瑞也（編）（1995）. 人間関係の発達心理学Ⅰ - 人間関係の生涯発達 培風館
- 島田知華・桂田恵美子（2015）. 幼児の向社会的行動 - 母親自身の向社会的行動や養育態度との関連 - 関西学院大学心理科学研究, 41, 45-49.
- 鈴木麻里（2008）. 感情表出の男女差 東京女子大学言語文化研究, 17, 39-50.
- 鈴木隆子（1992）. 向社会的行動に影響する諸要因 - 共感性・社会的スキル・外向性 - 験社会心理学研究, 32, 71-84.
- 鈴木有美・木野和代（2008）. 多次元共感性尺度（MES）堀洋道（監修）・吉田富二雄・宮本聡介（編）心理測定尺度集Ⅴ - 個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉（pp.123-127）サイエンス社出版
- 鈴木有美・木野和代（2008）. 多次元共感性尺度（MES）の作成 - 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて - 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 登張真穂（2003）. 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 辻岡美延（1976）. 親子関係診断尺度 EICA 実施手引き 日本・心理テスト研究所
- 八越忍・新井邦二郎（2007）. 母親の養育態度が小学生の社会的スキル、共感性、学校適応に及ぼす影響 発達臨床心理学研究, 18, 33-40.